

平成26年度（2014.4～2015.3）の研究活動の概況

生体防御医学研究所・所長

佐々木裕之

（ささきひろゆき）

生体防御医学研究所は九州大学の誇る4つの研究所のひとつとして、生体の恒常性を維持するために重要な「生体防御」を研究テーマに据え、生命現象の本質に迫る基礎研究を展開すると共に、生体防御機構の破綻による疾患の発生機序の解明と診断、治療法の確立を目指した研究を展開しています。本研究所は昭和57（1982）年4月、温泉治療学研究所（大分県別府市）と医学部附属癌研究施設（福岡市東区）を統合して設立されました。平成25（2013）年2月16日には九州大学病院別府病院（温泉治療学研究所）創立80周年とあわせ、盛大に創立30周年記念式典、記念講演、記念祝賀会を開催したところです（一昨年度の年報で報告）。本研究所はこれまでも国立大学附置研究所として国内屈指の研究実績を誇り、国際的にも高い評価を受けて参りましたが、平成22（2010）年度より文部科学省より共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」に採択され、真に世界的な研究教育拠点を目指しています。また、平成26（2014）年度には、平成25（2013）年度に続いて、九州大学大学改革活性化制度により3教員ポストを新規獲得して、トランスオミクス医学研究センターにメタボロミクス分野を新設しました。2年間で合計6教員ポストの純増は快挙であると思います。平成26年度の主な活動状況は以下の通りです。

1. 平成25（2013）年4月に設置したトランスオミクス医学研究センターに、新たにメタボロミクス分野（教授1、准教授1、助教1）を新設した。これにより、本センターはゲノミクス分野（旧遺伝情報実験センター）、エピゲノミクス分野（教員はエピゲノム制御学分野が兼任）、プロテオミクス分野、メタボロミクス分野、及び統合オミクス分野（平成25年度新設）の合計5研究分野の体制となった。すなわち、多階層の生体分子情報（オミクス情報）を横断的に活用して、様々な生命現象や疾患の「鍵分子」を見つける体制が整った。教員選考の結果、メタボロミクス分野には平成27（2015）年3月に馬場健史教授（阪大准教授より）が着任し、様々な代謝物の網羅的解析の研究を推進することになった。
2. 平成26（2014）年4月1日付で佐渡敬准教授（エピゲノム制御学分野）が近畿大学農学部教授へ、同年5月1日付で山本健准教授（ゲノミクス分野）が久留米大学教授へ、同年8月1日付で東田裕一准教授（分子免疫学分野）が九州大学稲盛フロンティア研究センター教授へ栄転した。また、平成27（2015）年3月31日付で前所長である谷憲三朗教授（ゲノム病態学分野）が退職し、東京大学医科学研究所社会連携講座の特任教授として転出することになった。尚、谷憲三朗教授には九州大学名誉教授の称号が授与された。
3. 鈴木淳史教授（器官発生再生学分野）が第11回日本学術振興会賞を受賞した（平成26（2014）年12月19日）。また、山西芳裕准教授（システムコホート学分野）が平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「若手科学者賞」を（同年4月10日）、石谷太准教授（細胞統御システム分野）が日本生化学会第11回柿内三郎記念奨励研究

賞を受賞した（同年10月15日）。

4. 神田大輔教授（構造生物学分野）を領域代表者として、文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究（複合領域）「動的構造生命科学を拓く新発想測定技術－タンパク質が動作する姿を活写する－」（平成26～30年度）が採択された。神田教授はこの功績により九州大学主幹教授の称号を付与された。
5. 先端的な研究を積極的に推進し、発表した学術論文の合計は140報に上った（客員教授含む）。そのうち、インパクトファクターが10を超える科学雑誌に掲載された論文は4報あった（*J. Exp. Med.*誌（免疫遺伝学分野、福井宣規教授）、*Immunity* 誌（分子免疫学分野（免疫制御学分野）、山崎晶教授）、*Hepatology* 誌（器官発生再生学分野、鈴木淳史教授）、*J. Clin. Invest.*誌（分子医科学分野、中山敬一教授））。
6. 第24回ホットスプリングハーバー国際シンポジウム（平成26年度九州大学生体防御医学研究所国際シンポジウム）「Recent Advances in Immunology and Inflammation 2014」を開催し、Mark M. Davis 博士ら5名の著名な海外演者を招いて、活発な討議を行なった（平成26（2014）年11月7、8日、コラボ・ステーション II）。参加者は200名を越えた。
7. 11の生命科学系の国立大学研究所が交代で毎年開催している研究所ネットワーク国際シンポジウムの第9回シンポジウム（阪大蛋白質研究所・微生物病研究所共催）「Molecular Targets for Diseases and Structural Life Science」に教員や学生が参加し、発表や討議を行なった（平成26（2014）年6月19、20日、大阪大学銀杏会館）。
8. 共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」（平成22年度～平成27年度）として公募により54件の共同研究、1件の研究集会を採択し、それぞれ実施・支援した。
9. 特別経費（プロジェクト分）「新世代プロテオミクス技術によるシグナル伝達経路全貌解明」（平成22年度～平成27年度）により研究を推進した。
10. 研究所全体の交流の場として、平成26（2014）年5月14日に親睦会（コラボ・ステーション II）（215名参加）を行い、同年7月22、23日に第17回生医研リトリートを開催し（ホテルセキア、熊本県南関町）（160名参加）、4題の優秀口演賞と4題の優秀ポスター賞を選出した。
11. 国内外から第一線の研究者を招聘して合計20回の生医研（多階層生体防御システム研究拠点）セミナーを開催し、活発な討論を行なった。尚、そのうち9件は英語で講演・討議が行われた。

生体防御医学研究所では、一昨年より「研究所概要」と「ホームページ」のスタイルを一新しました。国立大学の研究所においては、高品質で独自性の高い最新の基礎研究成果の情報を発信することはもちろん、社会貢献・国際貢献の活動を社会に対して目に見える形で示すことで、コミュニティにおける存在感を高めることが重要となってきました。これらの課題に適切に対応するため、今後とも生体防御医学研究所教員・学生・スタッフ一同、より一層の努力を行う所存です。何卒、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成27年4月1日